

レリーフのクリブ



『おめでとう。恵まれた方。
主があなたと共におられる。』

ルカによる福音書 第1編28節

◎ 12月の予定

3日(金) 校内研修会

16日(木) クリスマス礼拝

～17日(金)子どもたちの祝会



22日(水) 給食終了

23日(木) 2学期終業礼拝、教職員協議会

◎ 1月の予定

6日(木) 教務委員会、教職員協議会

7日(金) 3学期始業礼拝、聖書教室

11日(火) 校内研修会、給食開始

ステパノスポーツタイム

お天気にも恵まりました！



感謝

2020年8月に井口一世理事より、群馬銀行様を通してテント3張を寄贈いただきました。遅くなりましたが、11月10日に贈呈式を行いました。大切に使用させていただきますと思います。



「ありがとうございます！」1年生と一緒に写真に入っていました。

◎今月の行事から

○クリスマス礼拝 12月16日(木)

今回も新型コロナウイルス対策を踏まえ、各学年ZOOMを活用し、礼拝をお捧げいたします。それぞれ場所は離れていても子どもたちも教職員もみんなで心をつなにして、イエス様のご降誕をお祝いします。

○子どもたちの祝会 12月16・17日(木・金)
例年のように小学校、中学校それぞれで1つの劇を作り上げるのではなく、1学年や2学年での小さなまとまりでクリスマスに関する動画を事前に撮影、編集します。当日は2日間に分けてお互いに作成した動画を鑑賞します。

今年は小学校高学年が聖劇を担当します。新型コロナウイルス対策を踏まえ、音声と役者の動きを別々に撮影します。新たな方法でイエス様のご降誕を伝えます。

小学校低・中学年はクリスマスに関することを発表します。聖句の暗唱や聖歌を練習しています。

中学校は各学年でテーマを決め、オリジナル劇を作ります。脚本を自分たちで考え、役者に加え、大道具や小道具、音響や照明などの裏方の仕事も行い、劇を作り上げます。クラス全員が協力し、1つになり、それぞれのカラーが出る唯一無二のオリジナル劇が完成することが楽しみです。

今学期もご協力ありがとうございました。

私学教育功労賞受賞

学園長 小川 正 夫

新しい図書室の書架に原田マハの「奇跡の人」が並んでいたの、仕事の合間に読んでいました。まだ鉄道が敷かれていない一二十年も前の青森県中津軽地方を背景にして、去場安と、介良連という二人の女性の生き方を描いたもので、引き込まれるように読み続けていたとき、電話がありました。

日私小連の児玉宏之事務局長からでした。「おめでとうございます、小川先生。私学教育功労者として文部科学大臣から表彰されました。私学としても名誉なこと、とてもうれしです」ということでした。



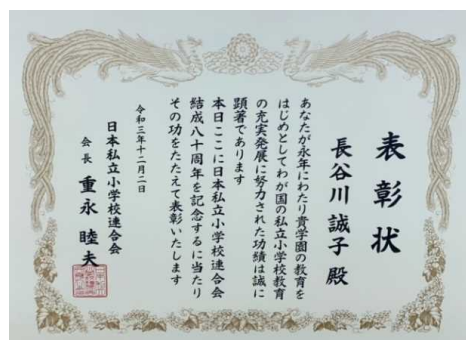
十二月二日、東京アルカディア市が谷（私学会館）で日本私立小学校連合会が組織されて八十周年記念の日の式典があり、席上で、日本全国で永年私学教育に貢献してこられた十六名の教職員が、末松信介文部科学大臣から表彰され、私学発祥の地と言われている神奈川県からは三名が選ばれ、その内の一人に聖ステパノ学園の私の名前がありました。

私は、中学校、高校、大学と私学で学び、私学教育に関わって六十五年になりますが、その間、時代の変化や異なる社会的な背景がありました。目指す教育の精神は、今まであまり変わらず、心に鮮やかに残っています。

初めて小中高大一貫関連教育を行う小学校の教師になり、四十五名の個性豊かな男子のクラスを受け持っていました。休み時間に校庭で子ども達とドッジボールをしていた時、そばで見ていた当時の有賀千代吉校長先生が「神様は、あの子も、愛しておられるんだよな、小川君」と、かけられた言葉が鮮やかに今も心に残っており、ずっと私を支えてきてくれています。私学とはそういうところかもしれない。表彰状を戴いて家に帰るとき、電車の中で最初に浮かんできた思いは、表彰状には、私の名前が書かれています。本日は、この職場で直接に子ども達に関わってきた教職員一人ひとり、そして、その働きを支援してくださってきた多くの方々へ送られてきたものなのだ、皆さんに感謝しなくてはいいなという思いでした。

私立小学校永年勤続表彰受賞

小学校教頭 長谷川 誠子



私が聖ステパノ学園小学校にお世話になったのは、今から三十六年前。なんと長い年月が過ぎたことでしょう。たくさん小学校がある中で本校に導かれ、長い間お勤めできたということは、神様のお恵みにほかありません。

たくさん子ども達、保護者の方々、先生方との出会いにより、たくさんのお話を学ばせて頂きました。学校が変化し成長してきた過程の中で、皆さんと共に歩むことができたことは本当に幸です。

今回、日本私立小学校連合会の八十周年記念式典で私立小学校永年勤続者として表彰して頂きました。全国の私立小学校の先生方と一緒に表彰して頂き感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、子ども達のため、学園のために微力ではありますが努めてまいります。

光に導かれて

卒業生保護者 新庄 すが江

「わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道に導く。」

イザヤ書四十八章十七節

二宮に住んでいた頃、自給自足を目指して野菜作りに挑戦したことがあります。

病気に強く、実入りが良いと言われる接木苗を購入し、大収穫を夢見ながら水やりに精を出す幸せな日々。

ところが―。労した割に、報いは少なく、（なにもあんなに頑張らなくても、無人の八百屋で、朝採りの野菜が安く買えるのにね。―）語らずとも、そう思っているであろう家族の冷ややかな目？に、心は萎え、いつしか菜園は野草たちの楽園へと化していきました。

後に、地元の農家の方から、野菜作りの基本は、まず、土作り。良い土壌を作ることが一番大事なのだと教えられました。

確かに、聖書にもこう記されています。

「また、別の種が良い地に落ちた。すると芽生え、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」

マルコの福音書 四章八節

この苦い経験を通して、学んだこと。それは、子育ても野菜作りと同様、我が子の健全な成長を願うなら、まず、その土壌となる良

い学び舎が必要だということ。

そこで、その時から、イエス様に、

「子どもたちにとつて、ふさわしい学校をお与え下さい。」

と祈り始めました。すると、主は、その祈りに答えて下さり、四人の子どもたちを不思議な方法で、この学園へと導いて下さったのです。

話は突然、旧約聖書の世界に飛びますが、かつて、イスラエルの民はエジプトで四百年間、奴隷の生活を強いられていました。その苦しみの中で、彼らが神に向かって叫ぶと、神は彼らをそこから脱出させるために、モーセという人物を召し出し、エジプトの王のもとに遣わしました。その時、彼を通して神が語られたみことばは、

「わたし(神)の民を行かせ、彼らをわたしに仕えさせよ。」

でした。

神に仕える―。

それは、神に対する奉仕行為であり、その第一が礼拝でした。そして私たち人間は、万物の創造主なる神を礼拝するために創造されたのだと、聖書は語っています。

聖ステパノ学園では、毎日の学園生活が、礼拝から始まります。クリスチャンホームに生まれ育った我が家の子どもたちにとって、このことは、まさに良い土壌であることの大きな証でした。

毎日捧げられる礼拝の中で、この学園の子どもたちは、自然と聖書のみことばに触れ、そのみことばは、いつの日か、彼らの心の中に、決して揺らぐことない不動の礎(信仰)となつて、卒業後も、その心を全き平安のうちに守ってくれることを私は主にあって信じ祈っています。

「そのように、信仰は聞くことから始まり聞くことはキリストについてのみことばによるのです。」

ローマ人への手紙十章十七節

「あなたの子どもたちは、主(イエス様)の教えを受け、あなたの子どもたちには豊かな平安がある。」

イザヤ書五十四章十三節

十数年前に、この学園から巣立っていった我が家の子どもたちも、今では皆成人し、それぞれに与えられた道を、喜びと感謝をもって歩み続けています。彼らの心の中に宿っている、いのちの言葉とともに―。

そして、この学園に導かれたことにより、敬愛してやまない小川学園長と出会えたことは、私の人生の中で、主から受けたこの上ない祝福と感謝しています。

このクリスマスの時、聖ステパノ学園に集うすべての愛する方々の上に、主の祝福が豊かにありますように。

心を込めて、メリークリスマス！

(オリーブの木キリスト教会牧師)

神様からの贈り物

聖書科教諭 咲間 直人

気が付けばもう十二月です。今はイエス様のご降誕を待ち望む降臨節（アドベント）の時ですが、師走とはよく言ったもので、この時期を一言で表すなら「忙しい」でしょうか。年の瀬となり、そこまでやらなくてはいけないことが目白押しです。職場では仕事納め、家庭では大掃除等、そんな大忙しの中で大切な降誕日であるクリスマスを迎えます。

そんな中、自宅の本棚にある『クリスマス・ボックス』という本にふと目がとまりました。これはリチャード・P・エヴァンスによって書かれたもので、大きな屋敷に住む老婦人と、そこに一緒に暮らすことになった一つの家族（夫婦と娘の三人家族）との交流が描かれています。その本の中に「機会費用」という言葉が登場します。要約すると時間やお金など全ての資源には限りがあり、ビジネスマンは仕事において、それを行うことでどんな機会がつぶれるか秤にかけなければ成功はおぼつかないというものです。秤にかけるゆえに、選ばなかった（失われた）機会があります。そんな仕事に邁進する家族の父親に対して、老婦人が「この世で最初のクリスマスの贈り物は何だったか、考えたことある？」と尋ねますが、父親には答えが分かりません。クリスマスはイエス様のご降誕をお祝いす

るためのものです。ですから最初の贈り物はまさに救い主であるイエス様そのものというのは間違いありません。ですが、大切なのは、イエス様のご降誕が行われた意味です。父なる神様が罪から私達を救うためにご自身のみ子を遣わされたという行為は、私達を愛してくださっているという事実であり、私達に向けられたこの「愛」そのものが、最初の贈り物です。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

ヨハネによる福音書 第3章16節

神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。

ローマの信徒への手紙 第8章14節

だからこそ私達は、神様を「アツバ、父よ」と呼ぶことをゆるされています。クリスマスはの出来事はまさに神様の愛の証です。

本の中で父親は愛する娘の貴重な子ども時代を、仕事を理由に顧みず、本当の意味で共に過ごせていなかったことに気が付きました。私自身、目の前のことに邁進して「誰のために」それを行っているのかを忘れがちです。それはある意味で、自分だけがその現状と向き合う孤独な状態です。しかし、

神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない」と言われました。

ヘブライ人への手紙 第13章5節

私達が困難の中にあっても、神様は一人ひとりを気にかけてくださっていますし、気が付かなかったとしても周りには、支えてくださる方が必ずいます。それはとてもとても幸せなことです。クリスマスはそんな大切な事実も思い起こさせてくれます。

イエス様のご降誕を待望するこの降臨節、「期待して待つ時間」は、老若男女問わずワクワクするものかと思います。新型コロナウイルス感染症のために期待していたことができず、失望に変わるという経験もありました。しかし、主のご降誕がもたらした意味と救いは、決して失望に変わることはありません。

心と身体にゆとりがない時期かもしれませんが、忙しさにとらわれ心をなくすのではなく、神様が示された愛を受け止め、感謝し、同じように誰かを大切に思う心を意識しつつ降臨節を過ごせればと思います。そして、その誰かと過ごせる「今」という時間は本当に限られた唯一無二のものだと改めて思います。毎年繰り返すものであっても、全く同じ状況、状態、気持ちというのは、決してありません。限られた時間を共有できる今にも感謝しながら、降誕日を待望し、その日を迎えた時には、共に祝いいたしましょう。

教諭 米原 佑樹

中学校の放送委員会では、昨年度からお悩み相談コーナーを設けています。お悩みを投稿するのは中学校の生徒たち。旧職員室前にある空き箱に匿名で出されたおたよりに放送委員の生徒が小気味よく答えていきます。

放送は給食の時間にお馴染みのイントロが流れてスタート。「お時間十二時四十五分を過ぎました、今日のパーソナリティは〇〇と●●でお送りします」とラジオ風の番組紹介から、中三Kくんの流暢な発音で「This is FM STEPHEN. Enjoy your lunch!」とヒー付きのかっこいいジングルが続きます。

曲紹介の後にはオールナイトニッポンの音楽に合わせていつものコーナーが始まります。「ペンネーム、シーラカンス三号さんからのおたよりです。夜にふとんをちゃんとかぶったはずなのに、寝相が悪くてふとんがはがれてしまい毎朝凍えています。どうしたらいいですか。」まるでベテランはがき職人のようなペンネームとおたよりです。聞いている生徒たちも「あるある!」とうなずきながら聞き入ります。私ならどう回答するかちよつと考えてしまうのですが、放送委員の子たちは慣れたもの。楽しく笑いながら「ロープで自分をぐるぐる巻きにして寝れば?ぬいぐるみで体を囲んで寝返りがうてないようにすれ

ば?」と一通りふざけてから「電気毛布で温かくして寝るといいですよ」と最後は至極まっとうな助言をしていました。程よく盛り上げながらもしつかりと着地させる見事なトークに思わず感心してしまいました。

おたよりは「英語の読解が苦手です」「家でのチャネル争いが大変です」など種類も様々。最近では先生方にも参加して頂いていて、咲間先生が恋愛相談に答えてくださった回はなかなかの反響がありました。

今では押しも押されぬ人気コーナーとなつたお悩み相談ですが、実はコロナ禍でお昼の放送が中止されたことがきっかけで始まったものでした。それまでは委員の生徒が合間に給食を食べながら生放送で話していたのですが、黙食のご時世にこれはできません。仕方がないと諦めて活動自粛していたのですが、ある日「マスクをつけて事前に録音して、それを流してみよう」と委員会で話し合い、無事にお昼の放送の復活となりました。

録音放送に切り替えたことで、思わぬ効果がありました。生放送では緊張から原稿の棒読みになりがちだった委員の生徒たちが、録音となつて緊張がとけ、遊び心とアドリブを交えた楽しい放送をするようになったのです。黙食で静まり返っていた教室に、いきいきと話す生徒たちの放送が初めて響いた時は、胸のつかえがとれたような解放感がありました。そして多くの反響をもらい自信をつけた委員から「みんなも参加できるようにおたよりを

募集しようよ」と発案されたことで、お悩み相談コーナーが始動したのでした。

放送委員の生徒たちは、みんながみんな普段からコミュニケーションを得意としている子たちではありません。それでもマイクの前に立てば楽しそうに話し始め、懸命に友達の相談にのっている彼らを見ると、こんな日々にあつてこそ新たに始まっていくものもあるのだと気づかされます。

この二年弱、あまりに多くのことが中止になりました。その時々状況に一喜一憂しながら「この行事はできるんじゃないか」「工夫すればできるんじゃないか」とその都度祈るようなもがいていましたが、いつの間にか悔しさを通りこし、諦めることに慣れてきている自分に気づく日があります。生徒たちから「なんでできないの」と聞かれることも減りました。しかしそんな中にあつても、今だからこぞできる新しい取り組みにのぞむ子どもたちをみれば、叶わなかったことを振り返ってばかりではいけないと姿勢を正されます。ある日の放送で「苦手な食べ物はありましたか」というお悩みに対して委員の子が「まあ立ち向かうしかないですよ」とあっさり回答を終わらせて笑いが起きたことがありました。嫌なことがあつて、時々諦めそうになつても、立ち向かうしかない。たしかにその通りかもしれせん。子どもたちと笑いながら、アイディアを出し合いながら、これからも励んでいきたいと思えます。

「小学校・小学六年生の修学旅行は、京都方面へ訪問しました。一日目は清水寺や銀閣寺、金閣寺へ、二日目は二条城と嵐山方面に行きました。子どもたちの作文から抜粋します。」

楽しかった修学旅行

(小六 IH)

この前、小学校一番のビッグイベント、修学旅行で、京都に一泊二日してきた。ものすごく楽しかった。ステパノの六年生の皆と行けたのが、すごくうれしかった。

まず一日目、新幹線で二時間かけて京都駅に到着。そこからバスで清水寺に行った。三年坂のお土産通りをのぼり、門にたどりついた。ネットで調べた画像が、目の前に広がっていて、感動した。舞台からのながめは最高で、とても気持ちよかった。



次に銀閣寺へ行った。すごくおそく、気分がおちついて、良かった。大文字山が見えなかったのは残念だったけど、枯山水が、とてもきれいだった。



その後金閣寺へ行った。銀閣寺とは正反対に、すごく派手で金きらでまぶしかった。だから、感動した。そして、きれいだった。その夜は、京都ではな

ったけど、滋賀県の琵琶湖グランドホテルに泊まった。大きな温泉や、豪華なお食事、キレイなお部屋があつて最高だった。何より最高だったのが、朝四時に起きて、部屋の皆(H君、N君、M君)でTVを観たりカードゲームで遊んだりしたのが一番だった。



ホテルを出て、次にバスで向かう先は、二条城。参勤交代などの大きな歴史をもつこの徳川家の城、二条城は、全てが国宝なので、流石に空気が重かった。忍よけのための「うぐいすばり」があるので、城内を歩くと、「キシッ、キシッ」と音が出た。すばらしい一刀ぼりやふすま絵が、とてもすごかった。



次に、天龍寺&嵐山に行った。池の水、竹林など、自然豊かできれいな所だった。ただ、天龍寺の中を観られなくて、残念だった。



そして、新幹線で帰って来た。あつという間だった。そして、とても楽しかった。次は二泊三日以上で行きたいと思った。

先日のステパノスポーツタイムの感想です。

青空の下でのSST

(小六 HU)

今日はステパノスポーツタイム(SST)でした。

コロナのえいきょうで大勢が集まって運動会を行う事が出来ないと和田先生に言われた時は少し残念でした。僕は行事の中でも運動会がとっても好きだからです。しかし、修学旅行の前日、急に和田先生が、小学生だけで小さい形で運動会ができると言いました。とてもうれしかったです。

そして今日の朝、皆でいすをグラウンドに運び、準備を始めました。グラウンドはきれいに線がひかれてテントがあつて、いつもの運動会のふんいきだなと思いました。

そして色々あつて徒競走。僕はTの足に僕の足がひつかかって転んでしまいました。でも、その時ふとパンフレットに書いてあった言葉を思い出しました。最後まであきらめずに風のように走り抜ける!! すぐ立ち上がって4人の後に全力でつづきました。あきらめずに頑張ったから1人ぬかす事が出来ました。

最後のリレーでは僕はアンカーでした。1年生からまわってきたバトンをしつかりゴールに持っていくて良かったです。

6年生という小学校最後の年の運動会は大成功に終われたと思います。有難う御座いました。

「中学校」中学三年生の修学旅行は、埼玉県の「原爆の図 丸木美術館」や世界遺産である群馬県富岡製糸場の見学を中心に行きました。

被爆者ではなく私たちと同じ人間

―原爆の図 丸木美術館を見学して―

(中三 AH)

絵の展示されている部屋に入った瞬間、胸におもりがついたように重くなり恐怖を感じた。どこを見ても黒と赤の中、服を着ていない人々の絵が目に入ってきたからだ。

美術館の方から絵や絵を描いた丸木夫妻の話を聞いた。丸木夫妻は原爆が投下されてすぐ広島に向かったそうだ。そして私たちのような後の世代にも、見てきたものを伝えるため絵を描いたそうだが、とても勇気ある行動だと思った。私は絵をパッと見ただけでも怖く感じたのに、実際に見た夫妻はきつと、もっと怖くて辛かったのではないだろうか。

最初に見た絵は真つ赤な炎の中、真つ赤な血で覆われた一人の女性が印象的だった。どこを見ているのかうつむいていて、表情は読み取れずただ立って腕を伸ばしていた。私はこの人が何かを感じているのか分からなかった。もう痛みすら感じない状態なのかと思った。そんな風に見えた人が何人もいた。しかしそんな中にきれいな黄色のひまわりが見えた。一面真つ赤で、人々が真つ黒な中、不思議な物に見えた。

一番印象に残った絵は、「虹」という作品だ

った。真つ黒な絵の中、急に目に入ったのが明るい青や赤などの鮮やかな色だった。絶望の中で、なんでこんな明るい色があるんだろうと思う、絵の題名を見ると虹だと分かり、なんでこんな状況でこんなに美しいのだろうと思った。

また別の絵の中で、西洋風の人形を持った女性がいた。口は笑っているように見え、しかし目は両方とも寄っていて、少し怖く感じた。けれど、人形を最後まで持っていたということから、きつと彼女はこの人形が好きだったのだなと思った。この時私は、この絵に描かれている人々は、ずっと被爆者だったのではなく、原爆が投下される前は、私たちと同じように好きなものがあり、花を觀賞し友達と遊ぶ、普通の人間の暮らしを送っていた「人」であるんだなと実感した。そして詩の「コレガ人間ナノデス」という言葉を思い出した。私は、絵に描かれている人は被爆者であって私たちとは違う、と感じていたのかも知れない。けれど丸木夫妻の絵をよく見ると、この人々にも生活があったと知ることができた。真つ赤な炎の中で子を必死に守る母の絵から、この絵の中の人々も最期まで感情を持っていた、とやっと分かった。

私は何枚もの絵を見て、やっと被爆者の想いに少し近づけた気がした。絵は写真と違って描いた人の考えや訴えたいことが込められると思うので、私が丸木夫妻の絵から感じ取れた想いを忘れずに大切にしたいと思った。



原爆の図 丸木美術館



富岡製糸場

富岡製糸場の感想

(中三 YM)

今回、富岡製糸場の見学に行つてまず思ったことは、工女たちの待遇が意外に良かったことです。まず場内には、工女たちの住む所や食事が無料で用意され、診療所では、無料で診てもらふことができました。さらに、毎週日曜は休日という、当時の日本にはない制度が取り入れられていました。

また、製糸場の構造も色々と工夫されています。例えば、壁は西洋から輸入した煉瓦で作り、骨組みは木材、屋根は瓦を使っています。内装は、屋根はトラス構造という建築技術を使って支えているので、柱がありません。そして、当時は電灯がなかったので、ガラスを大量に輸入して、ガラス窓をたくさん取り付けて建物内に光が行き届くように工夫されていた。

富岡製糸場は、機械で生糸を作る技術を日本に広めるために、国によって作られました。施設も最先端の技術を取り入れ、働く環境もとても良い職場場だと思います。



今号は、日本画家・堀文子さんの足跡を辿ります。二〇一九年に百歳で永眠されるまで、大磯町の自邸兼アトリエを拠点とされました。

東京麹町で生まれ育ち、青山にアトリエを構えていた堀さんが大磯町に転居したのは、四九歳の時でした。夫を病で亡くした後、西洋文明を自分の目で見ようと世界を放浪した三年間の旅で、「ものを考え、感性を磨くには自然の中で暮らさなくては」と、東京からの「脱走」を決意、画家としての新しい挑戦を志して、「相模湾の豊かな自然が残り急行の止まらない、温泉のない」町を選んだそうです。高麗山の麓での暮らしは、「長年の都市生活者の自分を脱皮させ、自然の中に生かされている本来の人間に変貌させてくれ」、「自己主張が後退し、自然の命が私を満たしていくのが解った。大磯の十年は、私に日本の自然と日本画の真髄を教えた、かけがえのない時代だった」と、後に回想しています。

しかし、「一所不住」を旨として旅と転居は続きます。軽井沢の厳しい冬の自然に身を置き一年の半分を過ごす「山中独居」の生活を始めたのは六〇歳、「バブル景気に浮かれ、常軌を逸していた日本を嫌い」、イタリヤの小さな村にアトリエを持ったのは、七〇歳の時。

七十年代後半から八十年代にかけて南米、アマゾン、ネパール、ペルーへと「冒険に満ちた旅」を続けます。八一歳では、花期が年に十日しかない幻の高山植物ブルーポピーを求めて標高五千メートルのヒマラヤ高山へ向かい、がれ場の中で「決して群れず一株だけ生きる」花は「神の子」のようだったと記しています。

代表作のひとつ『幻の花 ブルーポピー』は、気高い静けさを纏いながらも孤高の強さが力となって迫り来るように感じられ、「群れない、慣れない、頼らない」という信念のままに生きた堀さんの姿と重なります。八三歳、病により僻地の旅が難しくなった時には、「不自由な体になっても感動を見つけることが出来る世界、顕微鏡を覗こう」と思い立ち、一滴の水の中のミジンコや珪藻など「極微の生き物が見せる驚異の世界の虜」となり、やがて脳の血管やニューロンまでもモチーフとして新作を描き続けました。八十年代半ば、自邸の向かいの敷地にあった樹齢五〇〇年の巨木が、土地の売却のため切り倒されることを知り、阻止しようと二年近く各方面へ働きかけるも万策が尽き、土地を購入したといえます。借り入れをして手に入れたこの土地でのアトリエを最後の仕事場とし、「王者の威厳を持つ老木の下」で、最後の絵を描いたのだそうです。巨木は現在も「高麗ホルトノキ」の名で親しまれ（大磯町指定史跡名勝天然記念物）、二〇メートルにも及ぶ大きな枝を広げています。
*引用…堀文子『ホルトの木の下で』、他。

STEPHEN'S NEWS

【表彰】

◎実用技能英語検定

五級 小4 H・N 中1 S・S

中2 A・A 中3 Y・M

四級 中1 O・T 中2 T・T

三級 中3 T・R N・D A・H

準二級 中2 S・A 中3 A・N

◎令和三年度 大磯町小学生交通安全

ポスターコンクール

6 学年 優秀賞 小6 H・U

◎スクスクのつばくんカップ神奈川県

中央林間オレンジボール大会 11 月

オレンジボールの部

準優勝 小3 O・Y

◎第 55 回神奈川県中学校美術展

優良賞 中3 M・S

【訃報】

病氣療養中であつた中村弘之教諭が 12 月 4 日に永眠されました。心より哀悼の意を表すとともに謹んでお知らせ申し上げます。

ご冥福をお祈り致します。

代表者 学園長 小川 正夫

発行者 聖ステパノ学園小学校・中学校

ステパノだより編集委員会

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯 868

TEL 0463・611・1298

FAX 0463・611・9739

<http://www.stephen-oiso.ed.jp>

二〇二一年十二月十三日(月)発行 第 260 号